

塩谷 修 提出 学位申請論文

『前方後円墳の築造と儀礼』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論は、前方後円墳の築造と儀礼を論題に、古墳における祭祀儀礼の系譜と思想的背景、およびそれに関連する古墳時代の政治動向について考察したものである。論者は、前方後円墳の築造過程でおこなわれた種々の儀礼に注目し、それが喪葬儀礼であると同時に政治的儀式として重要な意味をもっていたと考える。そして、とくに墳丘での土器祭祀や埴輪配置の分析を中心に、儀礼の体系とその系譜・変遷を究明している。そうした視点から前方後円墳の歴史的意義と古墳時代の特徴を再検討することが、本論の基幹に据えられた研究課題である。

序章では、表題に関する論者の問題意識と儀礼研究の必要性を述べ、過去の研究史を詳述して問題を整理している。前方後円墳の築造自体が儀礼としての本源的な意味をもっていたとの考えから、古墳築造とそれに伴うあらゆる喪葬行為や儀礼行為を包括して捉えるために、「前方後円墳築造儀礼」という新たな分析概念を提示する。そして、具体的な検討課題として、①祭祀儀礼の系譜、②祭祀儀礼の秩序と階層性、③祭祀儀礼の波及と政治動向、④祭祀儀礼の場と形の変遷、⑤祭祀儀礼からみた古墳の変質・終末、⑥前方後円墳の時代的特質と画期、を措定している。

第1章では、関東地方の事例を中心に前期古墳での土器祭祀を検討

し、埋葬施設上の土器祭祀が初期の前方後方墳に多く前方後円墳には顕著でないこと、壺形土器の配列が大型前方後方墳に特徴的であることを明らかにしている。また畿内中核では、出現期の大型前方後円墳である箸墓古墳で、壺形埴輪の初源となる壺形土師器と、吉備型の特殊器台形・特殊壺形埴輪を共存させた埴輪配置がおこなわれたこと、それ以降は埋葬施設上の土器群が方形埴輪列の外側に移って土器祭祀の様相が変化したことを指摘している。

第2章では、関東地方の出現期古墳に顕著にみられる、埋葬施設上での壺・器台・高杯を用いた喪葬祭祀に注目し、その淵源が吉備を中核とする山陽・山陰地方の弥生時代後期ないし終末期の墳丘墓祭祀にあることを論証している。弥生墳丘墓の祭祀形態が東日本に波及したこの動きには、吉備の政治勢力の主導と東海西部地域の積極的関与が認められ、弥生時代終末期に、吉備を中核として東海・関東を含む広範囲にわたり各地の首長層の間に緩やかな連合関係が成立したのではないかと推論している。

第3章では、古墳時代前期に円筒埴輪とともに盛行した壺形埴輪について検討している。円筒埴輪と壺形埴輪は、前方後円墳の出現とともに大和でほぼ同時に成立したが、吉備の墳墓祭祀に起源をもつ前者と、畿内の墳墓祭祀を起源とする後者とがどのような関係にあるのかは明確でなかった。論者は全国各地の壺形埴輪を集成して検討し、東日本と九州に多く、とくに東日本では主に大型の前方後方墳に伴う事実を明らかにした。一方、東日本の初期円筒埴輪は、大型前方後円墳には顕著に伴うものの、前方後方墳に伴う事例はほぼ皆無である。こ

うした事実を論拠として、これらの二種の異なる埴輪が、弥生墳丘墓の時代からのそれぞれの儀礼的系譜と出自を背景に、前方後円墳と前方後方墳とを序列化した古墳の階層表示や身分秩序と結びつき、優・劣の関係をもって生成されたと解釈している。

第4章では、北関東における前方後方墳の築造と儀礼について検討し、前方後円墳に対峙する前方後方墳の独自の性格を儀礼上から明らかにする。そして、上野と下野・常陸との間に認められる前方後方墳の様相の相違を問題とし、前者には弥生時代後期以来、東海地方との緊密な関係性が保持される一方、後者には大和政権との政治的、戦略的関係性がうかがわれるとし、そこに認められる北関東の政治勢力の二面性について論じている。

第5章では、常陸北部における出現期の前方後円墳である星神社古墳と梵天山古墳を取り上げ、東日本では破格の規模を誇るこれらの二基の前方後円墳でおこなわれた儀礼の様相を検討し、器台形円筒埴輪と壺形埴輪の年代、および儀礼の系譜を明確にするとともに、古墳群の構成や推移を明らかにしている。それらの新知見を踏まえ、古墳時代前期前半には大和政権が東山道よりも東海道を重視していたと考察している。

第6章では、前期の大型前方後円墳に伴う台形状施設に注目し、土器や土製品を用いた喪葬儀礼の場としての性格を検討している。前期から中期にかけて古墳での儀礼の様相は大きく変化し、埋葬施設上での土器祭祀は終息し、畿内系大型高杯・埴形土器を用いた新たな祭祀が普及する。台形状施設の出現もそれに関連した現象と考えられ、こ

れが中期に定型化する「造り出し」の起源になったと論じている。そして、こうした一連の儀礼変化の背景に、大和政権の専制化が始動する政治的変革を読み取る。

第7章および第8章では、前期中葉から中期初頭に出現する家形埴輪（第8章）と盾持人物埴輪（第7章）の二種の形象埴輪を取り上げ、全国各地の出土例の綿密な分析に基づいて、型式と変遷、地域色などを明らかにしている。そして、これらの二種が後期末葉まで通時的に作られ広域に普及した理由を考察し、盾持人物の原形が古代中国において葬送を先導する「辟邪の方相氏」と考えられること、また家形埴輪は漢代画像石に描かれた被葬者を迎えもてなす神仙界の「楼閣建物」を意味すると解釈している。つまり、埴輪配置の由来と意味について、漢代から南北朝期に隆盛する神仙思想に基づく他界観が導入されたと理解し、その本質は、神仙思想の辟邪と奉仕の理念のもと、前方後円墳の築造によって可視化された他界の演出に他ならないと結論づけている。

第9章では、国造制やミヤケ制の成立、群集墳の盛行など、政治的・社会的に大幅な変革が起こったとされる古墳時代後期について、その歴史的な位置づけの再検討を試みている。常総地域の後期・終末期古墳の特徴である箱式石棺や板石組横穴式石室、石棺系石室など、片岩利用の埋葬施設の地域的展開およびその変遷を明らかにし、儀礼の系譜とその推移を検討している。その結果、前・中期から後期には祭祀儀礼に連続性が認められるのに対して、後期と終末期との区分が置かれる7世紀初頭には、古墳での儀礼に大きな変化が起こった事実を

浮き彫りにする。その背景に大和政権による地域支配の大きな政治的変革があったと想定し、前方後円墳に象徴される一つの政治的体制とそのイデオロギーが終焉を迎えたと結論づけている。

終章では、以上の各章での考察を総括し、次のように結論をまとめている。

前方後円墳の出現とともに創出された儀礼体系は、弥生時代におこなわれた在地首長墓祭祀の系譜を受け継ぎつつ、中国伝来の神仙思想の要素が導入されて形作られた。大和政権は、この「前方後円墳築造儀礼」の共有化を梃子に各地域の首長層を一定の階層的身分秩序に編成し、列島各地への勢力伸張を図った。この儀礼体系は、王権の専制化に向けて中期初頭にその改革が図られたが、後期まで一貫して一つの政治体制を維持するイデオロギーとなっていた。ところが、古墳時代後期末葉の7世紀初頭頃になると、前方後円墳の築造、埴輪配置による他界の演出、埋葬施設の密封や被葬者への飲食物の供献など、神仙思想に由来する儀礼体系が根本的に廃止されることとなった。大和政権の成立とともに制度化された特色ある儀礼体系が終焉を迎えた後期末葉は、前方後円墳が思想的にも政治的にも従来の存在意義を失う大きな歴史上の画期にあたる。これに続く飛鳥時代や律令制の時代は、古墳時代の継承・発展の結果というよりも、そのイデオロギーを否定し、思想や政治体制の変革の上に成立した新たな時代と評価すべきである。

論文審査の結果の要旨

本論は、前方後円墳における儀礼の検討を通して、古墳時代の政治構造とイデオロギーを追究した研究である。本論の特色は、古墳築造とそれに伴う儀礼行為の全体を「前方後円墳築造儀礼」として捉え、それを基軸に前方後円墳とその時代の特徴を描き出そうとする点にある。前方後円墳の成立とともに創出されたこの儀礼体系は、弥生墳丘墓での首長墓祭祀の系譜を受け継ぎつつ、中国の神仙思想の要素が導入されて形作られたものであることを、古墳での土器祭祀や埴輪配置などの分析から多面的に論証している。前方後円墳は単なる埋葬用の墳墓ではなく、その築造自体が儀礼の実修であり、古墳時代の政治構造を支えるイデオロギーの可視表現であった、と論者は主張する。

本論には従前の古墳研究にはない重要な新事実と見解が数多く提起されているが、それらは大筋として以下の四つの要点に集約することができる。

第一の論点は、古墳における祭祀儀礼の系譜とその思想的背景である。まず、古墳の埋葬施設上でおこなわれた土器祭祀が、弥生時代終末期の首長墓祭祀に起源をもち、広域的な政治連合の形成とともに統合され体系化されたこと、そして土器祭祀の場や形を変えながら古墳時代前期から後期にかけて連綿と継承されたことを、全国的な視野での資料分析から克明に論じている。一方で、盾持人物埴輪や家形埴輪が神仙思想に基づく方相氏や楼閣建物に由来することを論証し、古代

中国からの思想的影響があったことを明らかにしている。論者の見解では、前期古墳の壺形埴輪や円筒埴輪に始まり、家形埴輪や器財埴輪、人物埴輪などを加えて次第に整備された形象埴輪群は、神仙界を可視化し「辟邪」と「奉仕」を体現する舞台装置であった。つまり、論者は古墳の築造とその儀礼を、他界観を含む根源的なイデオロギーの表現と考え、前方後円墳に象徴される政治体制の成立と地方波及の背景にも、そうしたイデオロギー操作が大きく関わっていたと理解する。

第二の論点は、古墳と儀礼の階層性である。論者は、前方後円墳と前方後方墳が墳形だけでなく儀礼面でも異質な存在であることを、主として関東地方の事例分析から論証している。前期古墳に配置される円筒埴輪と壺形埴輪は、ともに弥生墳丘墓の儀礼に起源をもつが、本来その系譜と出自が異なり、前方後円墳と前方後方墳との性格の違いが儀礼の系譜差に端的に表れている、と指摘する。祭祀儀礼の系譜が古墳の序列や身分秩序と結びつき、優劣の階層性をもって執りおこなわれていたことを指摘した点は斬新であり、重要な学説として注目される。

第三の論点は、関東地方の古墳からみた政治動向である。関東地方の出現期古墳でおこなわれた土器祭祀は、山陽・山陰地方の弥生墳丘墓での土器祭祀から系譜を引くものであり、それが東日本に波及した背景には、弥生時代終末期における吉備の政治勢力の主導と東海西部地域の積極的関与があったと見る。吉備を核とする広域的な首長連合の形成とともに東日本へも同質の儀礼体系が受容されたとする論者の

見解は、古墳時代初頭の政治動向の理解に大きな問題を投げかけている。また、大和政権が前方後円墳築造儀礼の共有化を梶子に列島各地へ勢力伸張を図った事情についても検討を加え、北関東地域の古墳を対象とする事例研究から、前期前半には大和政権が東山道よりも東海道を重視していたことを明らかにした。中期には、前方後円墳や円筒埴輪が各地に広まるとともに古墳での祭祀儀礼にも変化が現れる。畿内では後期横穴式石室の規格化に伴って斉一化がさらに進展したとされるが、常総地域における古墳の様相は後期においても画一的なものではなく、古墳時代後期に成立したとされるミヤケ制・部民制のような統一的な身分秩序はまだ確立しておらず、前期以来の伝統的な階層表示が存続していたと考察している。

第四の論点は、古墳の変質と終末である。後期初頭における畿内型横穴式石室の普及に伴って大陸から新たな他界思想が伝わったという説があるが、論者は儀礼研究の見地からこれに反論している。後期古墳にみられる土器祭祀は前・中期からの伝統を継承しており、盾持人物埴輪や家形埴輪からも、古代中国の神仙思想を起源とする他界観念が一貫して受け継がれていたと見る。横穴式石室の普及とともに他界観が刷新されたとは考えず、神仙思想に由来する前期以来のイデオロギーが前方後円墳の築造と儀礼によって維持されていたと理解する点が、論者の学説の核心となっている。しかし、古墳時代後期末葉の7世紀初頭頃に前方後円墳の築造や埴輪配置がおこなわれなくなり、前期以来の伝統的儀礼体系が終息したことは、前方後円墳に象徴される政治的体制とそれを維持したイデオロギーの終焉を意味し、そこに時

代の大きな変化と画期が認められると結論づけている。

以上のように本論は、前方後円墳に象徴される古墳時代の特質と歴史について儀礼研究の視角から考察した特色ある研究である。前方後円墳の本質を他界の可視化と解し、その築造自体が他界を演出する儀礼の実修であったと考える立場から、大規模な前方後円墳が王や首長の代替わり毎に繰り返し築造された理由を理解しようとする。古墳築造とその儀礼を総体として捉え、思想やイデオロギーの面から時代の特質を論じた研究は希少であり、斬新な古墳時代像を提起した本論の学術的意義は大きい。

ただし、古墳での儀礼の研究には、埋葬主体部に置かれた多様な副葬品やそれらの配置、あるいは墳丘自体の形や石室の構造なども検討課題となるが、本論での体系的な論及はない。また、古墳以外の場でおこなわれた同時代の神まつりの遺跡や祭祀遺物との関係性についても比較検討の視点を欠いている。

そうした面に課題は残るが、古墳とその時代の特質を祭祀儀礼の意味や思想的背景という視角から描出しようとする論者の研究視点は一貫しており、長年にわたる堅実な実証的研究により独自の新説を論じ切っている。その研究水準は古墳研究の一つの到達点と評価し得るものであり、古代社会における祭祀儀礼の重要性を再認識させた点でも、従前の古墳研究にはない斬新さと今後への確かな展望がある。

よって申請者塩谷修氏は、博士学位（歴史学）を授与される資格があると認められる。

平成27年7月15日

主査 國學院大學教授 谷口康浩 ㊟
副査 立命館大學名譽教授 和田晴吾 ㊟
副査 宮内庁書陵部
國學院大學大学院客員教授 福尾正彦 ㊟

塩谷 修 学力確認の結果の要旨

下記3名が各専門分野からそれぞれの学力確認の試問を行った結果、博士（歴史学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成27年5月25日

学力確認担当者

主査 國學院大學教授 谷口康浩 ⑩

副査 立命館大学名誉教授 和田晴吾 ⑩

副査 宮内庁書陵部
國學院大學大学院客員教授 福尾正彦 ⑩